マッセ・市民セミナー
（NPO法人ちゃいるどネット大阪共催）

非認知的能力の育ちをめざす保育実践

登壇者：鳴門教育大学附属幼稚園園長・教職大学院教育実践教授
　　　　佐々木　晃 氏

日　時：令和３年７月26日㈪　14：30～16：30

会　場：高槻市子ども未来館３階　研修室

マッセ・市民セミナー（北摂ブロック研修）

非認知的能力の育ちをめざす保育実践

講師：佐々木　晃 氏（鳴門教育大学）
日時：令和３年７月26日㈪　14：00～16：30
場所：高槻子ども未来館　研修室

１．３法令の改訂の背景とポイント

鳴門教育大学附属幼稚園の園長をしている佐々木と申します。本来なら先生方のところに馳せ参じてお話しするところを、本日はこのような形でお話しさせていただく失礼をお許しください。今日、先生方にお話しするのは、現在の幼児教育のトレンドの一つでもある非認知的能力についてのお話です。

既にご存じのとおり、平成30年に「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の３法令が同時改訂されました。同時改訂はわが国の幼児教育界で初めてのことです。これはご存じのとおり、昨今始まった幼児教育無償化をにらんでのことです。

この改訂は小中高校の学習指導要領改訂に先立って行われたわけですが、これには大きな時代的背景があります。私たちはその時代の保育をしているので、その時代の私たちに求められるミッションについても知っておく必要があると思います。既にいろいろなところで聞かれたと思いますが、もう一度おさらいさせてください。

教育の今日的課題は、中教審でもいわれているように、子どもたちが成人する近い将来は、生産人口がさらに減って老齢化社会が進んでいます。そして今回のコロナでも思い知らされたように、グローバル化がものすごいスピードで進んでいます。グローバル化の進展と絶え間ない技術革新によって、社会そのものが大きく変化する可能性を秘めています。私たちが運転している車も、数年先にはハンドルを回さなくても目的地に着けるような発達がなされることが考えられます。

このような厳しい挑戦の時代を乗り越えるために、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持った自立した人間、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていけるような力を育てることが、私たち幼児教育の人間のミッションでもあります。つまり、今までのように何かを教えておけば一生ものだというような安心・安全が保障されない時代を迎えているということです。ですから、知識の質・量を両方とも改善する必

要がありますし、どのように学ぶかという学びの質や深まりも重視して、どのような力が身に付いたかという学びの成果についても必要とされています。

経済協力開発機構（OECD）教育・スキル局長のシュライヒャーさんは、私たちのミッションは子どもたちをスマートフォンより賢くする教育を行うことであると述べています。スマートフォンに使われて、依存して、それがないと生きていけない、あるいはSNSやさまざまな怪しい情報に翻弄されてしまうような人間ではなく、上手に使いこなしながら自立した幸せな生活を営める、スマートフォンより賢い人間を育てることが私たちのミッションなのです。

ここでおさらいします。先ほど申し上げた３法令は一体何が大きく変わったのかということです。実は今回テーマにしている非認知的能力とも大きく関連するので、この辺をおさらいしたいと思います。

まず、保育所保育指針改訂のポイントは、何といっても０～２歳児の保育に関する記載が充実したことです。これまでは養護というポイントを大事にして、幼い子どもたちを守り育ててきましたが、それ以外にも、ものとの関わり人との関わりということで、乳児期からのラーニングプログラムを進めることが認識され、特に非認知的能力の芽生えを促す教育が大変強調されて、記載のボリュームがアップしました。

例えば、赤ちゃんは泣きます。乳児が「おぎゃー」と泣いたら先生やお母さんが飛んできて、「おーおー、よしよし」と言って赤ちゃんをあやします。そういう中で既に、非認知的能力の芽生えを促す教育を先生方がしているのです。赤ちゃんのときは、泣くことしかできないといっても過言ではありません。すると必ず、先生、お母さん、優しい大人、信頼できる大人がやって来て、「おーおー、よしよし。おなかがすいたのかな。おしめかな。それとも熱があるのかな。なぜ機嫌が悪いんだろう」とあやしてくれます。赤ちゃんはそのとき、自分が泣いたり、苦しかったり、嫌だったりしても、必ず放っておかれない存在、つまりこの世に生まれてきてよかった、自分は価値のある人間だという非認知的能力の根源になる部分が育っていきます。

私は東京大学の遠藤先生からこのお話を伺って、感動して少し泣いてしまったのですが、赤ちゃんのときには言葉がありません。私たちはあのときこうして、こうだったと言語で記憶していきますが、言葉のない赤ちゃんは気持ちが悪かったり、苦しかったり、おなかがすいたりすると泣きます。泣くと必ず先生や大人がやって来て、助けてくれます。

自分は生まれてきてよかったのだという自己肯定感の根源ができると言いましたが、子どもたちには言葉がないので記憶に残りません。しかし、「おーおー、よしよし」とされながら、子どもたちは希望を残すのだそうです。私は生まれてきてよかったのだ、生きていていいのだ、世界は信頼できる、大人は信頼できるという、生きることへの希望の根源ができるわけです。記憶できないから逆に希望ができる。私はその話を聞いて「なんて素晴らしい話なんだ」と思って、遠藤先生の大ファンになりました。実は先生方が日常行っていること、おしめを替えたり、ミルクを飲ませたりすることは、言葉のない乳児でも実は非認知的能力をしっかり育てているということが、最近の心理学や脳

科学の研究で分かってきました。

保育所が幼児教育の場として積極的に位置付けられ、保育内容や保育の計画・評価をしっかり行うことが定められたのも大きな変革のポイントです。

幼稚園教育要領等における３歳児以上の教育の改訂のポイントとしては、幼児教育で育みたい資質・能力として「10の姿」が明記されました。「10の姿」は私たちにもかなりなじんできました。育成すべき資質・能力の三つの柱が、幼児期、小学校、中学校、高校の学校教育の縦のつながりの中で継承され、大事にされており、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」がしっかりと縦の軸となりました。今回の改訂は、保育所・こども園・幼稚園の横の軸と、幼児期・小学校・中学校・高校という縦の軸がきちんとできたことが、幼児教育を含む教育界にとっての大きな出来事でした。

そういうことで、私たちはこれらの資質・能力をしっかりと育て、小中高とつないでいこうということで、カリキュラム・マネジメントをしっかり確立していくことが加えられていることも忘れてはいけません。

今回出てきた「10の姿」については、勘違いも多いようです。機会があればそのことについて必ず説明するようにと文部科学省から言われているので、お話しします。私は平成30年度の改訂には直接関わらなかったのですが、その前の平成20年度改訂で解説書作成委員を務めており、責任があるのでお話しします。

私たちは、健康、人間関係、環境、言葉、表現のいわゆる５領域で、子どもたちが育つための指導計画、教育課程を作りますよね。子どもたちは遊びや生活の中で、将来の基盤となる心情・意欲・態度などが培われ、育っていきます。そして、この子たちが小学校に上がる前、学校教育に接続する大事な幼児期の終わりの時期に、３歳、４歳、５歳と育ってきた心情、意欲、態度、学びに向かう力を評価しようということで「10の姿」ができました。そのねらいと内容は54もあるのですが、分かりやすいからこの「10の姿」で指導計画や教育課程を作るのは駄目なのです。

「10の姿」には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と書かれています。「育ってほしい」とはどういうことかと思われませんでしたか。私はずっと思っていたので、あるとき文部科学省に聞いたところ、「育ってほしい」には特別な意味はなく、幼児期に育てたい姿、育てたい力が、この５領域のねらいと内容で書かれているのだそうです。育てたい力は、この５領域のねらいと内容で、それが本当に育っているかどうかを評価して、幼児自体を深めたり保育を改善したりするという意味で、「10の姿」が幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿として現れています。そういう姿が実現できたら、これらのことが育ってきていると評価でき、育っていなければ、それが子ども固有の問題なのか、それとも先生の関わりの問題なのか、それとも保育する環境の問題なのか、それとも家庭的な問題なのか、さまざまな問題について考え、振り返り、より良い保育を創造していくために、これらの観点があるわけです。

こんなに紛らわしくて間違えられそうなのに、なぜわざわざ出してきたのかと批判さ

れますが、それは小学校の先生方にうまく引き継いで分かってもらうためというのが大きなポイントです。例えば「数量・図形、文字等への関心・感覚」がありますが、数量・図形は小学校でいえば算数、文字は国語です。「幼児教育ではどこでそれを教えるのですか」と聞かれると、幼児教育の専門の先生方は100％答えられます。それは領域・環境です。環境の中で数えたり、比べたり、重ねたり、あるいは文字があったり、標識があったり、記号があったり、絵本があったり、物語があったり、いろいろな環境があるので、領域・環境だといえるはずです。

ところが、それを聞いた小学校の先生は何と言うかというと「環境といったら普通は理科でしょう」と言うと思います。「環境問題になると社会科の問題だ」と言うと思います。それぐらい幼児期の発達に合った指導方法と、小学校以上の児童期に合った指導方法では違うので、先生方の認識も違うのです。そこをうまくつないでいけるように、このような「10の姿」をねらいと内容のエッセンスから引き出しました。これが平成22年に出されたときには12あったのですが、10にまとめました。「自然との関わり・生命尊重」「道徳性・規範意識の芽生え」は元々別であり、12あった名残でもあります。

「10の姿」は、今日のテーマとしてお話しする非認知的能力とも大きく関係しています。「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」は直接には勉強とつながりませんが、いろいろな学びを下支えする非認知的能力です。思考力、自然との関わり、数量・図形・文字・言葉による伝え合いは、直接勉強につながっていく認知的能力です。今回の５領域、そして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」というのは、非認知も認知もきれいに書いて定められていることが大きな特徴です。つまり、私たちの幼児教育の指標となる指針や要領には、最新の脳科学や心理学の知見がしっかり入っているといえます。

２．すごいぞ　日本の幼児教育

次はいよいよ、本題である非認知的能力の話をしようと思います。私は、日本の幼児教育はすごい、先生たちはすごいということを、非認知的能力の研究の話をしながらお伝えしたいと思っています。

私たちが平成元年から散々行ってきた、心情・意欲・態度といった非認知的能力を育てる実践は、世界の最先端であり、もっと自信を持っていくべきです。今回の幼稚園教育要領等では、非認知的能力は「学びに向かう力・人間性」とされています。そして要領では、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」が三つの柱となっていますが、「学びに向かう力・人間性等」にだけ「基礎」が付いていないのは、今まで私たちが行ってきた幼児教育において、心情や意欲や態度といった非認知的能力を育てる中で「学びに向かう力・人間性等」をずっと大事にしてきて、既に幼児期から子どもたちの中に育っているからです。

非認知的能力は今から６年前、ヘックマン博士の『幼児教育の経済学』という本が刊行され、大変読まれるようになって、はやり始めました。内容はその名のとおり、幼児

教育をしておくと経済的に幸せになれるという内容です。

日本の研究者もたくさんの本を出しています。慶應義塾大学の女性科学者、中室牧子先生も『「学力」の経済学』という本を書いています。それに関係して非認知の本がたくさん出ています。ボーク重子さんは、アメリカの最優秀女子高校生を娘に持つお母さんですよね。私たち附属幼稚園は国がつくった機関なので、新しい心理学や教育学の知見が出たら、それを日本の教育に生かすためにどんな工夫が要るのかとか、本当にそれは大事なのか検証しており、それを冊子にもしました。

今日はそのことをお話しするのですが、「そんなに難しいことばかり書いてある論文を誰が読んでくれるのですか。世の中の人は全然関心を持ってくれませんよ」とチャイルド本社に言われて、絵と文で易しく書き直したのが『０～５歳児の非認知的能力』という本です。良かったらお手に取って見てください。今日お話しする内容が書かれています。

ヘックマン博士の研究はどんなものかというと、今から60年前、ソビエト連邦と、アメリカを中心とした自由主義国がしのぎを削っていました。負けてしまえば世界中が社会主義国になってしまうので、絶対に負けられません。水爆、核開発、いろいろなところで頑張って、互いにしのぎを削っていました。そしてあるとき、負けてはいけないはずだったのに、アメリカを中心とした自由主義の国々が、あっと驚きました。負けてしまったのです。ソ連の方が先に人工衛星スプートニク号を宇宙に飛ばしてしまったからです。「これは大変だ。ワシントンは狙い撃ちだ。どうするのだ」という話になります。

大統領命令で原因を調べました。当時のアメリカは犯罪者が多く、社会のお金を教育や科学に集中することができていなかったので、開発競争に負けてしまったのです。犯罪者を調べると、多くは仕事がなく、仕事がないから悪いことをします。さらに、仕事がない人を調べると学校に行けていなかったり、途中で辞めてしまっている人が多いことが分かりました。さらに、学校に行けていない人を調べると、家庭が荒れているので学校に行く余裕がなかった、それから英語の分からない移民たちなので、学校に行っても勉強が分からなかったという原因が分かりました。

そこで、政府は早速、アフリカ系の貧しい黒人層の家庭に入り、一つは家庭教育支援ということで、先生方がなさっているようなしつけや家庭教育を１週間のうち２日間行いました。良い子育てができるようにしたわけです。もう一つは、英語教育にも力を入れました。英語が分かってから小学校に上がるので、子どもたちは授業についていけます。その結果どうなったかというと、今から三十数年前、自分がまだ大学で研究や勉強をしていたときには、ヘックマン博士が行ったこの実験は失敗だったといわれていました。なぜなら、勉強は小学校に入って最初はいい感じであっても、後から来た人にどんどん抜かれていくからです。アドバンテージは４年間しか持たなくて、早期教育はあまり意味がないといわれていました。それは、前の20～30年の間に、いい大学に行った人も少なく、いい会社に入った人も少なかったからです。ところが、それからさらに30年、60年というスパンで見ると、アメリカ的ではありますが、確かに成功していたのです。

この実験の被験者グループと実験を受けていないグループを比べると、月収2,000ドル以上になった人の割合は、被験者グループの方が断然大きいのです。また、持ち家率も被験者グループの割合の方が約３倍多いです。そして、生活保護を受けなくても生活できる人は、被験者グループの割合の方が倍以上多いです。このことが分かって世界中が大変驚き、この研究を基に、幼児期にお金を投入して経済的な支援をするようになりました。

それまで私たちの幼児教育は、三つ子の魂百まで、小さいときの教育は一生ものなのだということが経験的には語られてきましたが、科学的な追跡調査で明らかにされたのはこれが初めてでした。

ヘックマン博士は、後にノーベル平和賞も受賞したのですが、とても大事なことを幾つか言っています。一つは、小学校・中学校・高校と後になるほど教育の効果が薄いので、４～５歳の幼児期に行う方が効果があるということです。もう一つは、IQを長期的に高めることは難しい、つまり乳幼児期の早い段階から教科教育を開始しても、長期的にIQを向上させるという点では効果が薄いということです。先ほども、勉強は早くやってもあまり効果がなく、４年のうちに抜かれていくと言いましたが、では何が経済的な成功に導くのかというところが大きなポイントになります。

ヘックマン博士によると、人間の能力は認知的能力と非認知的能力、つまり勉強による力と勉強によるものではない力に分かれるということです。日本でいえば読み・書き・そろばんが勉強の力です。そうではない非認知的能力が子どもの勉強の力を下支えして、ずっと発達させてきました。つまり、非認知的能力である真面目さ、粘り強さ、自制心、忍耐力、気概、首尾一貫性といった、信頼できる人間性の育成につながる就学前教育こそが重要だということです。しかし、日本の私たちが普通に考えて、真面目に粘り強くこつこつ頑張っていたら、何でもできるようになると思いますよね。そこが欧米の人と考え方が異なるところです。

もう少し詳しく説明すると、能力が認知か非認知かというのは大変荒っぽいということで、東京大学の遠藤先生、秋田先生が、非認知というよりも社会情動的スキル、つまり社会性や気持ちをコントロールするようなスキルと言った方がいいのではないかということで、非認知的能力と同じ意味で社会情動的スキルという言葉が使われるようになりました。

大事なのは、それを構成している柱です。日々保育している先生方はそれを現場で行っているので、もっと自信を持っていただきたいのですが、一つ目は、「目標の達成」です。「暑いけど、みんなで夏祭りを成功させよう」「コロナに負けずに、マスクをしていても絶対に盛り上げるぞ」といった目標への情熱、忍耐力、暑くてもズルをしたい気持ちを抑える自己抑制です。

二つ目は、「他者との協力」です。最近、ノーベル賞でも文学賞以外はみんなチームで取っています。協働することがとても大事であり、思いやりや敬意、社交性、「ありがとう」「ごめんね」といったこと、「お友達のこと応援してあげて」といったことを、

先生方も日々指導していますね。日本の教育では、そうしたことを非常に大事にしています。

そして三つ目に、「情動の抑制」です。これがとても大事です。自分をコントロールする力のことであり、実行機能ともいわれています。情動の抑制については、アメリカの心理学で面白い実験があります。「佐々木君、ここにマシュマロがあるよ。先生は向こうの部屋に行っています。このマシュマロを食べずに我慢できたら、先生はあなたに２個マシュマロをあげるよ」と言うと、非認知的能力の弱い佐々木君は「先生、行ってらっしゃい」と言うと、このマシュマロを我慢できずに食べてしまいます。なぜなら、先生との約束を守る自信がないし、先生に「佐々木君、見損なったわ」と言われても傷付くプライドはないし、「今食べておかないと、いつ食べられるか分からない」と思っているからです。

ところが、非認知的能力、社会情動的スキルの高い人は、「先生、行ってらっしゃい」と言うと待つことができます。なぜなら、先生との約束を守る自信があり、「マシュマロぐらいで先生に見損なわれたら損だ」というプライドがあり、楽観的だからです。先生が帰ってくれば、「佐々木君は賢かった。よく待てた。お利口だ。２個と言っていたけど、３個あげるわ」と言われます。だから、わくわくしながら待つことができます。そういう人は勉強ができるし、仕事もできるし、将来成功するというのは想像しやすいですよね。

このことについて、詳しくは京都大学の森口佑介先生が『自分をコントロールする力』という新刊を講談社から出しているので、ぜひ読んでください。私は、それを面白おかしく簡単に言っているだけです。

ちなみに、私たちの幼稚園も５年前に研究しました。すると日本の保育は、このことがとてもよく育てられている保育だということが分かりました。例えば赤ちゃんのときに「いない、いない、ばあ」をしますね。そのときに先生が「いない、いない、ばあ」とやると、子どもが「いない、いない」のところでケタケタ笑い始めて、「ばあ」とやると余計に笑うことを経験したことがあるでしょう。子どもたちはそれを何回かやっていると、赤ちゃんであってもそのことを期待するので、先生たちも必ず子どもたちの期待に応えて、「ばあ」と喜ばせてあげますよね。そのときに「いない、いない」と言って本当にいなくなってみてください。それは人間不信のもとです。でも、必ず「ばあ」と出ていってあげるでしょう。保育の中でもこのようなことを先生たちは散々やっているのです。

「園長先生、ダンゴムシ」と言われて、「ダンゴムシは汚い。捨ててしまいなさい」などと言う園長はもちろんアウトです。「どれどれ」と見てあげますよね。あるいは、「先生、縄跳びができるようになったから見に来て」と言われて、「あさってね」と言う先生はいないでしょう。「どれどれ見せてごらん」と言ってあげますよね。つまり、先生のことを大好きな子どもたちは、先生のことを信頼しているから、私がこう言ったら必ず私の言うことを聞いて見に来てくれるという自信があって、わくわくと楽しみにし

て、先生が褒めてくれるという楽観性も持っています。

当園では、園長が玄関で「おはようございます」と子どもたちを迎えます。すると、親子で登園してくるときに、ある子どもが「園長先生、昨日、僕、USJに行ったか、行ってないか」と言いました。私は「コロナなのにそんなところに行かないでくれ」と言いたい気持ちを抑えて、「うーん」と言います。子どもはUSJに行ったか行っていないかを聞きたいわけではなく、本当の部分は「先生、僕のことを好きだろう？　僕が幼稚園がお休みの土日、何をしていたか気になるでしょう？」と言いたいのです。だから私は、「うーん、分からないな。ヒントは？」と言います。

もっとすごい子は「園長先生、今日の私のお弁当にハンバーグが入っているか、入っていないか」と言います。そんなことを言うのは怪しいからといって、「絶対に入っているだろう」などと言う園長はそこそこアウトです。子どもはハンバーグの話をしながら、本当は「園長先生、私のこと好きでしょう？　私がどんなお弁当を持ってきているか知りたくてうずうずしてるんでしょう？」と言いたいのです。だから私は、「ちょっと匂いを嗅がせてくれる？」と言って、くんくんとかぎます。しかも、子どもの期待どおり「入っていない」と言うと、「ブブー、入っています」と言って大喜びです。

実はわれわれの保育は、子どもたちの期待に応えるようなことをしながら、赤ちゃんのときに泣いたら必ず先生が来てあやしてくれるようなときから芽生えている、私は大事な存在なのだ、私は放っておかれないのだ、私は生まれてきてよかったのだという自己肯定感をしっかり育てながら、期待をすること、希望を持つことをしっかり育てているのです。これが日本の保育の先生方の抜群に素晴らしいところだと思います。

３．子どもたちは非認知的能力にあふれています

私たちは子どもたちを見る中で、子どもたちが非認知的能力にあふれていることが分かります。そして、非認知的能力というのはヘックマン博士の言うように、非認知か認知か、勉強の力か勉強でない力かというふうに白黒ではなくて、両方が関係し合って、賢く、強く、豊かに育っているのです。

４歳の子どもたちの事例ですが、当園では、マスクをしながらですけれども運動会も普通どおりにします。５歳の子どもたちは一輪車で10人も20人も手をつないで乗るので、運動会が終わると４歳の子どもたちがまねをして、「自分も乗りたい」と言って張り切って屋上で練習し始めます。

登園時、玄関で「今日も私一輪車の練習頑張ろう」とＫ子ちゃんが宣言するように言いました。「これを頑張ろう」などと聞こえるようにわざわざ言うのは、まさに自己肯定感です。「つまらないことを言うな」と言われることを恐れていません。そして、年長児に憧れを持って、しかも目標を立てています。やる気まんまんです。朝の職員ミーティングで担任から、「毎日一生懸命、一輪車の練習をしているので、Ｋ子ちゃんとＲちゃんがうまく乗れるようになってきた」と紹介があったところでした。「園長先生、Ｋ子はうまく乗れるけん、見に来てよ」と私を誘うので、屋上に見に行きました。「先

生、来てよ」と言うのはまさに承認欲求であり、人に依頼する言葉です。保育者への期待や信頼があります。

あるとき、４歳児空組の女児たち８人が、練習をしていました。K子ちゃんは、一輪車の上で時々手を叩きながら乗れるほど上達していました。一緒に練習していたUちゃんは私を見つけて、「手をつないで」と言いました。私はしっかりと彼女の手をつないで何度も練習していましたが、そのうちUちゃんは、もう片方の手で上手に乗れる友達２人、３人とつながって、メリーゴーラウンドのように回れるようになりました。手をつなぐ力を少し弱くし、３本の指で支えてみても、Uちゃんはバランスを崩すことなく乗ることができています。すると今度は「先生、小指１本だけつないで」と言うので小指を差し出すと、軽く私の指を握り、体が揺れることもなく安定して乗ることができました。「すごいね。あと少しだね」と言うと、「うん」とうれしそうにうなずきました。

このようにたわいもない出来事ですが、子どもたちは自分の頑張ろうとする気持ち、先生に「見に来てね」という気持ちを表現しながら、先輩たちに憧れて頑張っていきます。そうしたものが非認知的能力なのですが、実はこの中で認知的能力も育っています。挑戦する態度や人と関わる力が非認知的能力ですけれども、それが科学的なことに気付くような、勉強につながっていくような力になっていくわけです。

また、友達にライバル心を持ちながら根気強く粘り強くやる力、その中で友達と連帯しながら一緒に頑張り続ける力が育まれるわけですが、このときに子どもたちは認知的なことも考えています。どういうことかというと、上手なお姉さんと手をつないだら上手に乗れるようになったり、先生に片方を持ってもらって、もう片方も上手な人に持ってもらって、挟んでもらうと上手に乗れるようになるということです。

さらにいえば、子どもたちが一輪車に乗る中で、最初は５本の指でしっかりと手をつないでいましたが、次は３本の指でつながれるようになり、５本のときよりも上達していると感じるようになります。さらに小指１本でつながれるようになると、一番小さい指ですから、さらに自分は上手と感じるようになります。つまり、指の数と自分の上達力が反比例して、だんだん自分が上手になっていくことが実感できるのです。こうしたことは、実は勉強につながるような知的なことですし、その中で「上手になっているな」「頑張れているな」という気持ちや、「やったー」という達成感が非認知的能力になります。このようにハイブリッド車のようにして、あるときはガソリンで、あるときは電気でというふうに、知らず知らずのうちに両方が子どもたちに関係し合い、それで動いていくことで子どもたちの賢さ、たくましさが育まれるのです。

４．非認知的能力を育てる保育って？

先ほど紹介した森口先生の『自分をコントロールする力』の中で、先生がさすが京都大学と思うような素晴らしいことを言っているのでご紹介します。実行機能は、子どもが目標に向かって感情や思考をコントロールする力だというのです。どういうことかというと、感情の実行機能は、目標のために欲求を制御する力であり、思考の実行機能は、

目標を保持しながら頭を柔軟に切り換える力のことです。一輪車が上手になりたいという気持ち、毎日やってもなかなか上手にならないし、面倒くさいからやめたいという気持ちを抑えて頑張る力が、感情の実行機能です。そして、頭を柔軟に切り換えながら、友達に片方を持ってもらい、こちらは先生に持ってもらうというふうにバランスを取るようなこと、自分が上手になっていることは先生が手を持たないで乗れたらすぐに分かりますが、そこまで上手ではないので、指の数をだんだん減らしながら練習するようなこと、これが思考の実行機能です。

先生の著書には私たちの気になることがたくさん書いてあるので、少しご紹介します。まず、園のハード面（環境、広さ、遊具、備品など）の豊かさは実行機能の発達と関係していて、豊かである方が有利だということです。それから、子どもの健康面や衛生面に関する保育者の関わり方も同様です。つまり、子どもの健康や衛生を気に掛けた保育や環境ができているところは、子どもの実行機能がよく育つということです。また、子どもと保育者のやりとりやコミュニケーションで、「やってごらん」「いいね」などという支援的、支持的な子育てが良くて、すぐに叱り付けたり、ネグレクトをしたり、支配的に「お母さんの言うことを聞きなさい」などと言ったりするのはいけません。これらは脳の発達からしっかりと証明されていることです。

こうした実行機能を育てるときに、心の道具となるようなものが必要です。一つは、物理的な道具です。園のハード面が豊かなら、子どもたちはいろいろなことができていきます。もう一つは、心理的な道具であり、これが大事です。言葉や遊びなどのことです。友達の行動を見たり、学んだり、振り返ったり、考えたりできるような集団教育のときに、子どもたちの実行機能がよく育ちます。そして、何かをするときに自分の言葉で自分をコントロールすることも実行機能を育てます。また、ごっこ遊びや劇遊びでいろいろな遊びのルールを共有し、相手の気持ちを理解して自分をコントロールするようなことも子どもたちの実行機能を育てるのに有効です。詳しいことは本に書いてあるので、見てください。

今からお話しするのは、当園の杉山君の事例です。杉山君は教育実習のときに私が担当して、その後、当園に来てくれて、今では10年選手で、２児のパパになりました。この杉山君という男の子は、大変分かりやすいのです。何か嫌な顔をしていると、「杉山君、何か私に不満があるの？」と聞くのですが、絶対にあるのです。本当に分かりやすい、いい子なのです。保育もすごく分かりやすくて、何かを言うときに杉山君の事例で言うと皆さん非常によく分かるので、今日も杉山君の事例でお話しします。文部科学省が出している「幼児理解に基づいた評価」の101ページにも出ているので、良かったら見てください。

私たちが子どもたちの非認知的能力を育てるときに、実は先生も非認知的能力を発揮しているといえます。子どもたちが非認知的能力と認知的能力を上手に使っているように、私たちも保育の中で使いますし、実は先生の非認知的能力の使い方やアイデアを子どもたちがキャッチして、自分のものにしていることも分かります。その辺は、私たち

が子どもたちと一緒に生活や遊びをしながら大事にしたいことです。
　このエピソードは、４歳のユウカちゃんという女の子と５歳の子どもたちのやりとりです。私は現役時代に20年間、学級担任をした後、教育委員会に行かされてしまったのですが、20年のうち18年間は５歳の担任で、最後の責任を取らされていました。自分の組の５歳の子どもたちが、小さい組の子どもたちと関わる様子が非常に面白く、食い入るように見ていました。今は園長ですから、いつも３歳の部屋に行って、「園長、セミ取れ」などと言われながら張り切っています。
　自分の組の５歳児と４歳のユウカちゃんのエピソードです。イモ掘りで大学にある農園に行ったのですが、イモ掘りに行くと必ずイモを掘らないで触っている変な子がいます。ユウカちゃんはそんなタイプの子です。実はこの４月からユウカちゃんが本園の３歳の担任になって、やって来てくれました。「とてもうれしい」と張り切っています。では、事例を読んでみます。
　「おなかがすいてかわいそうよ」。園外保育で４歳児のユウカは、カナヘビを捕まえました。「きれいな色でしょう。うわあ、かわいい。私、幼稚園に連れて帰りたい。私のお友達にするの」。人間の友達を作ってほしいという感じですが、イモ掘りそっちのけでカナヘビを友達に見せたり、手の上をはわせたりしています。こんな変な子、いるでしょう。やがて彼女の周りに人だかりができました。「やめろよ。バッタがかわいそうだろう」と５歳のリョウタ。やはり５歳の子はしっかりしています。「この子だって、おなかがすいてかわいそうよ」とユウカが反論します。ユウカは、５歳児の言葉尻を捉えながら少しずつ自分の言葉にしていきます。そういうたくましさもあるのです。
　「このバッタはもう死んでいるから、いいんじゃないの」と５歳のサワコが応援します。５歳の子が４歳の子にがんがん言われているので、助け舟を出しているのです。そばから年長児が私にも投げ掛けるように、「でもなあ、幼稚園に連れて帰って飼うってことは、ずっと虫や動物を餌にすることになるんだぞ」と言って、今だけの殺生ではなく、飼うということはずっと命を与えることになるのに責任が持てるのかという話をしています。私はうなずきながら議論を聞いていました。
　「カメの餌ではいけないの？」とサワコが提案します。さすが５歳になると、トカゲとカメは似ているので、「カメの餌は幼稚園にある」と言います。「私、死んだ虫とかカメの餌あげるから」とユウカも言います。年長児は「勝手に連れていくのはいかん。ここで好きにさせておいてやれよ」とたしなめます。ユウカが言うことを聞いてくれないので、５歳の年長児は問題をすり替えて、人間の勝手で連れていくのはいけないと言うこの子は、政治家にぴったりだと思います。なかなかいいセンスをしています。
　「先生」と、ユウカが私に意見を求めてきます。私はこうしたらいいとジャッジしないで、できるだけ子どもたちが考えてくれるようにしたいと思っています。それが子どもたちの非認知的能力を育てると思うし、私はいろいろなことを今ひとつはっきり決められないのです。妻に「今日の晩、何がいい？」と言われても、「うーん、特に食べたいものもないし」と言うと、すごく怒られます。これがしたいということが、本当にな

いのです。ですから、保育のときはいつも自分の弱さをさらけ出しています。でも、それが今となっては結果的に良かったのだと思います。

私は、「僕はいつも悩むんだ。今日のおイモも畑から掘って帰るし」と言います。植物も生きているので、私はおイモを持って帰るということです。「魚釣りするときはエビやゴカイを針に刺して餌にするし、釣った魚も食べるし。うーん、悩むよなあ」。人間というのは、本当に悩ましいです。「できるだけ無駄に取ったりしないようにはしているし、頂いた命は『いただきます』と言って大事に食べているけど、うーん、難しい、悩むなあ」。私たちは生き物の命を頂いて食べ物にするから、生き物から食べ物になるときに「いただきます」「ごちそうさま」と言って感謝や礼を尽くします。そのようなことを一生懸命、この中で悩みながら言っているのです。

もたもたして煮え切らない私に、子どもはあきれて置いていきます。でも、置いていかれるのが子どもの主体性を育てるのに大事だろうと思っていて、自分では気に入っています。そうしているうちに、ユウカはカナヘビをくさむらに放しました。園長の話を待っていてもしょうがないと思ったのでしょう。「私がまた遊びに来てあげるってお話ししたの」と言って、ユウカは手を振っています。「ユウカちゃんはカナヘビの気持ちも分かるんですか」と私が聞くと、「うん、連れて行ってって言ってなかったもん」と言います。言えないと思うのですが、「まだ子どもだったのかなあ」と首をかしげて笑っていたというエピソードです。

この場合、先ほど言った認知と非認知でいうと、何が育っているのでしょうか。まず勉強にもつながる認知的能力に関しては、４歳児ともなると会話的行動がかなりできるようになり、文章もしっかりと複雑になってきて、文脈に応じて言葉を選択できるようになったり、５歳児が言っているフレーズを上手に使って自分の言葉にしたりできるようになっていることが分かります。ユウカちゃんの場合、カナヘビを放して「また遊びに来てあげる」と言っていました。つまり、現在・過去・未来という時間の軸をしっかりと意識しながら語るような力も４歳児なりに育っていることが分かります。私たちも保育しながらそのようなことを見て、子どもたちの育ちを知っていきます。

ここからも、最初にお話しした、非認知的能力と認知的能力が上手に組み込まれている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を評価することができます。健康な心や体があるからいろいろな活動にチャレンジできるし、自分たちなりに考えて最後までやり切ろうとしたり、協同性を持ったり、それはいいことか悪いことかを判断する道徳性・規範意識もそうです。さまざまなことを考えて、カメの餌なら生きるのではないかとか、命を粗末にしてはいけないとか、人間が命をずっと縛ってはいけないといったことを言葉で伝え合っています。トカゲを持ちながら「きれいでしょう」と言える感性はすごいと思いますが、私たちは子どもたちを見ながら、何が育っているのかということをしっかりと読み取っていきます。特に、トカゲはかんだり引っかいたりしないおとなしい生き物だということについても分かりながら関わっていて、この子はかなり生き物について知っている、経験があるということも感じさせてくれます。

私たちは保育をするときに、意図を持って見守ることがとても大事です。「見守る」とは、見ていることとは違うと思います。見て守っているのですから、その子が経験していることを守ってあげられて、もし危険があったり本当に困ることがあったりすれば、ぱっと手を差し伸べられるように見て守っているのが「見守る」だと思います。食物連鎖や動物の自由を奪うような飼育を幼稚園で行っていますが、果たしてそれは動物の側から見たらどうなのだろうということを考えながら、「ごめんな、子どもたちのために」ということで関わっています。

そういう中で、私は自身の悩みをさらけ出したのですが、子どもたちの様子、例えば小学校の勉強なら１＋１＝２というふうに正解があります。しかし、私たちの保育は、人間が思ったり、悩んだり、考えたりするような、ベターなことはあっても正解のないところで教育をしているので、先生たちが「そのことは本当に僕らも考えるし、悩むんだ」と言うこと自体が、子どもたちへのとても大切なモデリングになっているのだろうと思います。だから、保育のときに、煮え切らないような先生の姿があるというのは、逆に子どもたちの非認知的能力を育てる大事なポイントではないかと思います。

大事なことは、「連れて行ってって言ってなかったもん。まだ、子どもだったのかなあ」と言ってトカゲを放してあげた彼女に、「ユウカちゃんはカナヘビの気持ちも分かるんですか」と言って子どものことをリスペクトしていることです。よく考えて自分で決断したことが、まさに資質・能力でいわれている思考力・表現力・判断力につながることです。私たちの保育は日々そのようなことをしていると思いますが、それをプロとして意識化することがとても大事なことではないかと思っています。

５．理論から実践へ～非認知的能力育成のための柱

ヘックマン博士の研究を基に具体的な事例をお話ししましたが、私たち日本の保育者が、ヘックマン博士の社会情動的スキル、非認知的能力で目標達成、目標への情熱、自己抑制、忍耐力をそのまま受け取ると、下手をすると大変なことをしてしまうかもしれないということが研究の結果、分かりました。私たちは真面目なので、このとおりにすると目標を先生が子どもたちに与えてあげて、「暑いけどみんな、運動会頑張れ。熱中症になるかもしれないけど、それを乗り越えて栄光があるんだ」というふうに目標への情熱をたきつけて、「そのためには辛抱だ、我慢だ」となってしまうと、それは非認知的能力を育てるのではなく、ただ子どもが先生の言うことを聞くことを強調するだけで、むしろ逆効果ではないかということも分かりました。

私たちは、「目標の達成」「他者との協力」「情動の抑制」のスタートを目標達成とするよりもむしろ、「あんなふうに一輪車に上手に乗ってみたいな」「カナヘビを幼稚園で飼うとしたら何に気を付けて飼ったらいいだろう」という気付く力をスタートにして、好奇心や、感動する心や、いろいろ調べてみようと思う探究心を育んでいくのです。先生がスタートになると、我慢させることに終始してしまう恐れがあるので、やはり大事なポイントは子どもたちが気付いて、好奇心を持って、感動して、探求したいと思うと

ころからスタートするのが大事なことではないかという結論を得ました。

ですから、私たちはヘックマン先生のモデルを改良して、「気付く力」「やり抜く力」「人間を理解し関係を調整する力」の育成を柱としています。「やり抜く力」の中には、課題の達成に向かう力、やる気、頑張る力が入っています。やり抜くためには気持ちをコントロールしなければいけないので、情動をコントロールする力、自信や自尊心、期待や楽観性も必要です。そして、自分自身の体も使っていく必要があります。これはヘックマン博士の中にはなかったのですが、何をするにも身体的な力が必要です。そして、そういう中で人間を理解し、関係を調整する力をうまく働かせていくことを考えて実践しています。

特に、「人間を理解し関係を調整する力」というのは、大体子どもたちを見ていたらいろいろなところにあります。まず園にやって来ると、自分の家では王子様や王女様だった人が平等な仲間たちとの暮らしになり、いろいろなことで面食らいます。異質なものと出会い、自分の思うようにならないことを経験し、その中で必要なときには「先生、これやって」「先生、これどうして？」「ちょっと来て」と人に助けを求めます。あるいは、友達が嫌がる行為や事柄に関心を持つようになり、そんなつもりはなかったのに「嫌っ」と言って手を払われたりするようなことも経験します。それから、自分がされて嫌なことには、「やめて」「どいて」などと態度や言葉で表現します。嫌なことを受け流したり、距離を置いたりして、だんだん大人の付き合いができて、「君子危うきに近寄らず」でトラブルになりそうなときは少し引いておこうと考えたりします。自分と異なる行動や意見に対して考えるゆとりを持つようにもなります。子どもたちはだんだんステップアップして育っていくのですが、私たちはこのようなことを考えて、子どもたちの保育に当たっています。

異質なものへの興味や関心としては、他者の行為や言葉に関心を持ったり、他者の思い入れや思い入れのあるものに気付いたりします。人が作ったものを壊してしまったり、雑草だと思って抜いてしまったけれども、友達が一生懸命育てていた花の芽だったことに気が付くようなケースです。それから、他者の言い分に真剣に耳を傾けたり、だんだん発達してくると、感情をこめた言葉や論理的な言葉で伝えたり説明したり、他者の行為の意味について想像力を働かせたりということがあります。

他者との交流に関しては、友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、活動や遊びの中でやりたいことをしたり、なりたい自分を表現したり、イメージを共有したり、役割を分担したり、自分の気持ちや行動、他者からの評価などの変化に気付いたり関心を持ったりします。「友達が自分は優しいと言ってくれた」「〇〇ちゃんは、前には怒っていたのに今日は怒らなかった」といったレスポンスを受けて、自分自身の成長をうれしく感じたり、自分と違うところを持つ人に憧れて、いろいろな個性を認め合ったりします。

関係性をつくることに関しては、友達や他者に共感したり、応援したり、励まされたりし、友達のトラブルに介入したり、関係を調整したり、さらに大きくなってくると緊

張した場面をユーモアで和ませたり、解決したりします。さらには、問題に対して創造的に解決しようとします。

このように子どもたちが「人間を理解し関係を調整する力」を付けていることが自分たちの研究で明らかになったので、これを当園の保護者の皆さんにも伝えています。「うちの子がお友達に叩かれて、すごく嫌なんです。もう幼稚園に行きたくないって言うんです」という人に対しても、子どもは必要なときに人に助けを求めるようになっていきますから、「お母さんが言ってくれてよく分かりました。これから応援する目で見ておくので、〇〇ちゃんも『先生、ちょっと』と言うように言って、それができるようになれば、相手のお友達も人が嫌がることに気が付けるように指導していきながら、〇〇ちゃんも自分がされて嫌なことを『嫌』と本人に言える力を付けていきましょう」というのを保護者みんなが共有して、自分の子どもは今、どのステージにいて、次はこれが課題だというのを明確にしています。叩かれて、自分の言いたいことが言えないということだけで、「どうにかしてほしい」と言うのではなく、それを頑張ることで次のどのステップに上がっていくのかということを共有しながら、子育てを一緒に頑張っていこうとしているところであり、これはなかなか役に立ちます。

今お話ししたように、子どもたちが気付いたり、そのことについてもっと知りたいと関わったりすることから、非認知的能力も認知的能力もぐんぐん沸き立って、子どもたちは賢くなっていきます。すると、子どもたちの遊びが、だんだん豊かになっていきます。遊びが豊かになると、その中の学びも豊かになります。いうなれば、われわれ保育の仕事においては、遊びはごちそうで、学びは栄養です。遊びというごちそうを食べて、たくさん学んで力になる、体や心が育つということです。

これが逆になると、やはり順序がおかしくなります。学びが栄養なら、栄養だけあればいいということで勉強ばかり教えることになってしまいます。子どもたちがごちそうを食べる意欲や、世の中にはいろいろな食材があっていろいろなおいしいものがあって、みんなで食べたら楽しいということを知ることが、人生を豊かにするのです。栄養が大事ですので、サプリメントなど食べさせるような保育では駄目だと思います。「遊びはごちそう、学びは栄養」、このことが非常に大事なポイントだと思って実践しています。すると、非認知的能力がぐんぐん育ち、認知的能力も育っていくといえるからです。

今から見てもらうのは、水力ロケットの動画です。水力ロケットというのは、ホースの先に水を入れ、シューッと出すとホースからポンと弱々しくペットボトルが飛ぶ仕組みです。「今のは面白いな。またやってみよう」と言って子どもと発見し、だんだん上手に飛ぶようになっていきます。徳島県には吉野川が流れていますが、ある年、水不足が大変で、「附属幼稚園は水をたくさん使っていて住民感情が悪いから、あまり水を使わずに遊びなさい」と園長先生に怒られて、空気入れのポンプでペットボトルを飛ばすようになりました。

このぽっちゃりした男の子は、私の次男です。前の日に「なかなか飛ばんなあ」と言っていたらポーンと飛んで、おでこにこぶができたのですが、そのぐらいよく飛ぶの

です。私の妻、つまりこの子の親は大変厳しくて、いわゆるモンスターペアレントなので、隣の組だったのですが、「あなたの幼稚園はどんな安全教育をしてくれてるのよ」と幼稚園に怒鳴りに来られては困るので、息子は健気に水道水で前髪を濡らしておでこを隠し、「これでママにはばれんわ」と言って帰って、「ママ、ダンボールちょうだい」と言ってダンボールをせしめました。「ダンボールをかぶったら、当たっても痛くないわい」と意気揚々だったのですが、さすがの次男も分かりました。痛くはないけれども飛ぶ瞬間が見えないので、穴を開けました。今度は水が入るので、「ママ、ラップちょうだい」と言って、溶接工の人が被るようなものを作りました。

―動画開始―

すごく飛ぶのです。この子は自分の痛みを知っています。当ると痛いと思って、友達の後ろに入ったでしょう。ずるいやつです。女の子が下りて「早うせい」と言っています。

ここで言いたいことというのは、子どもたちは遊びや暮らしの中で必要感があって、「もっとロケットを飛ばしたい」という意欲を持つようになります。しかも、痛くないように危険を避けて飛ばすという必要感があれば、だんだん学びにつながるいろいろなものを引き寄せてきて学んでいきます。これが幼児教育のとても大事なところです。覚えておいてください。

―動画終了―

これを学びという点で見ると、小学校４年生の理科の「物質とエネルギー」という単元でこのような勉強をしています。なぜ、こんなことを言うかというと、実は私が委員を務めていた平成20年度の要領改訂のときに、初めて要領に「自発活動としての遊びは幼児にとって重要な学習である」というふうに、「学習」の２文字が入りました。それまでは幼児教育の世界に「学習」は絶対に入ることが許されなかったのです。ところが、「幼児教育は遊びや生活を大事にと言うけれども、そのようなものに金をかけて一体どうなるのか」と政治家からこてんぱんにやられたので、当時の文部科学省の調査官だった小田豊先生に、「遊びが大事だと言うけれども、そんなことは一般の人たちには分からないし、政治家にはもっと分からない。幼児教育で学んでいると言うと先生方はすぐに算数が何時間、国語が何時間と言う。おまえたちは、それが悔しくないのか。幼児教育の遊びは、その程度のものだと思われている。遊びの中で一体どんな学びがあるのか調べてみろ」と言われました。

私は、すごく嫌でした。遊びは人生の根幹を支えるものですから、理科や算数や国語と言われたらスケールダウンすると思っていたのです。でも、「もし理科や算数のことをちっぽけというなら、そのちっぽけなスプーンですくってみて、何かあったら言い訳が立つけど、何もなければ裸の王様であり、遊び、遊びとわあわあ言っているだけで、

何の説得力もない」と言われて、嫌々ながらやりました。そのような嫌なこともやらされるのが私たち附属幼稚園なのです。

国語・算数・理科・社会の中で教科書や学習指導要領を見て、ひもづけしました。先ほどのロケットでいえば、閉じ込められた空気を押すと、かさは小さくなるけれども逆に押し返す力が大きくなることを注射器で実験します。あるいは、閉じ込められた空気は押し縮められますが、水は押し縮められないので噴出して飛んでいったといえます。そういう遊びの事例を200個も採集し、今のように分析して、遊びには確かに学びの要素がたくさんある、下手をすると小学校どころか中学校の学びのようなこともたくさんあるということを言いました。

余談になりますが、先ほど縄跳びの動画がありました。縄跳びにしても、「先生、見てて。１、２、３、４、５」と飛びます。「全部で５回飛べた」というのは、算数でいうと全部で５回という集合数です。「先生、飛びたい」「あなたは２番目だから、ちょっと待っててね」というのは１番目、２番目という順序数です。このように、私たちが何気なく使っている言葉でも、算数・数学の基本がたくさんあります。しかし、それを無意識にやっていて、それを意識的に取り出してくれと言われたような研究だったのです。

でも、私たちが大事にしているのは、このような理科の勉強のことではないですよね。幼児教育で大事にしたいのは、次のようなことを体験的に知識として得られることです。まず、子どもたちはどんなペットボトルがよく飛ぶのか、いろいろ試行錯誤します。

それから、小さい500ミリリットルよりも大きい２リットルの方がよく飛ぶとか、ペットボトルに入れておく水の量も重要です。たくさん飛ばしたいのですが、水が入り過ぎていると飛ぶときに重過ぎて倒れます。少な過ぎるとプシュッと抜けて全く飛びません。一番いいのは、飛ぶ瞬間に３分の１ぐらいになっているとボーンと飛びます。東京に水ロケット協会というのがあって、私が担任だった25年前に電話して聞いたら、３分の１というのは当たっているそうです。

一番うまくいくチームスタッフもそうです。当園では子どもたちの非認知的能力を育てるために、最初から順番に並ばせたりしないので、見つけると子どもたちがわあーっと砂場に入り込んでいきます。すると、砂場がてんやわんやになって、砂場が修羅場となります。「私、水掛けられた」「あいつばかりやって、ずるい」となります。そして、もめます。子どもたちは、もめると全然楽しくありません。あるいは、友達を全員どけておいて、自分だけボーンと飛ばしても、誰も称賛してくれないので寂しいです。だから、子どもたちも気が付きます。どうしたら自分もリスペクトされ、順番も早く回ってきて、自分も飛ばせて幸せになれるか。先生方はどう思いますか。人をさっさと成功させて、「すごいなあ」と言って幸せにさせればいいのです。「バーン」「すごいなあ。佐々木、おまえもやってごらん。うそっ、すごいじゃん」というふうに、順繰りになります。だから、先ほどのビデオでも女の子が「早くやってよ、私たち待ってるんだから」と言っていました。

チームスタッフというのは、４～５人が水をくんできたり、セッティングしたり、

「３、２、１、０」とカウントしたり、一生懸命ポンプを押したりする人が順繰りになってやっていくと、回転は速いし、NASAのロケット発射基地のように盛り上がるし、いいことずくめです。そういう中で私たちは子どもたちを育てていきます。すると、先ほども言った健康な心と体、自立心、仲間との協調性、順番を守る道徳性、そして社会生活との関わりといった力や、どうしたらよく飛ぶのか、あるいは「３、２、１、０」とカウントダウンをしたり、どれぐらいの水の量がいいのかといった、数量、図形、言葉による伝え合い、いろいろな豊かな表現、こうしたものがしっかりと育っていきます。

つまり、遊びが充実していると学びも豊かですし、豊かな学びがあるぐらいに盛り上がる子どもたちは、自分たちで気付き、考え、チャレンジし、目標を持ってへこたれずにずっと取り組み、人間関係を調整しながら頑張るところに、本当に遊びの中での育ちが凝縮していることが分かると思います。

私たちは、そのようなことを考えて行うときに、いろいろな工夫をしています。次の事例も、人間関係を調整しながら行っていく事例です。先ほどトカゲを持っていた女の子が５歳になったときの様子です。

ここにあるのはチューリップの茎です。チューリップの花が散ると、茎の先の子房がくを取ると栄養が球根に行くので、切って葉っぱだけにして球根を太らせ、また秋に植えますよね。当園もそういう点での教材費はもらえないので、一生懸命工夫しながら花がきれいに咲くようにしています。

私は、子どもたちが遊んでいるときに切って、「遊んでいいよ。どうぞままごとにお使いください。新鮮です。取れたてです」などと言ってあげます。そうすると、子どもたちがやがて小学校に行って、植物が育つためには日光と栄養と水分という３要素が必要であることを学ぶときに、「そういえば、そんなことをやっていたな」と懐かしく思い出してくれればいいと思って、そのようなことを子どもたちの遊びの場でやっています。

ぐるっと囲んだ丸い電線ドラムは、私の妹の夫が職場からもらってきた廃材のキッチンテーブルです。中央の穴をガスコンロに見立てていることが分かります。「ぽきってしたら、筋が剥ける」とセリナが言うと、「筋を取ったら、あと水にさらしといてね」とリコがテンポよく言います。何をさらしておくのかと思いますが、女の子は本当に言語能力が高くてすごいですよね。話が愉快になります。

ついこの間も、おしゃれして踊っている３歳の女の子に「君、大きくなったら何になるの？」と聞いたら「セーラームーン」と言っていたのが、４歳ぐらいになると「パティシエ」と完全にキャリア教育に入っています。ところが、男の子は残念で、先ほどロケットを飛ばしていた次男も賢くないまま大人になってしまいました。３歳ぐらいのときに、「君、大きくなったら何になるの？」と聞いたら「うーたーまん」と言っていました。４歳のときに聞いたら「ウルトラマン」、５歳になると「ウルトラマンになります」と言っていました。それは言葉遣いが正しいだけで、そんな仕事はありません。ところが、男の子はやがて爆発的な力を出してくれるのを信じて、私は頑張っているのです。それはさておき、女の子は本当にすごいです。

もっと余談を言えば、ままごとで「コーヒー牛乳です」と言って子どもが持ってきてくれたので、３歳の子どもを驚かせてやろうと思って、マスクを取って本当に口に入れようとすると、「先生、待って。ばかだなあ。そんなの飲んだら病気になるよ」と言われたので、「ごめんなさい」と謝りました。もっとすごいのは、４歳児が石けんを泡立てて、「園長先生、フラッペができました。いかがですか」「おお、ありがとう。うーん、トレビアン」と言うと、「園長先生、ふざけないでよ。これは遊びじゃないのよ」としこたま叱られました。どう見てもままごと遊びだと思いますが、彼女たちは遊びではないぐらい本気度が高いのです。

これもそうです。「すみませんが、ちょっとアスパラをいただきますね」と言って、マキが水に入れる前の茎を何本か取っていきます。「新鮮なうちにお料理してね。時間が勝負なの」とリコが言います。リコちゃんがリーダーのようです。マキは、ユウカが砂や花びらを炒めるフライパンの中に、それを入れました。「火を最高に強くして」と言うユウカに応えて、マキが調理台にしている電線ドラムの縁をガチャガチャして、ガスを強くする仕草をします。昭和の事例なので、まだガスです。

「さあ、あとはちらしずしとスープだけね」。どんな取り合わせかと思うのですが、リコは両手を腰に当てて、体をほぐすように軽いストレッチをしています。前には、ボウルの水にさらした茎があります。「アクが強いのよね、フキなんかは」と、リコは時間がたつのを待っています。本当はリコちゃんの方がずっとアクが強いのです。しかも水だけでは抜けない強いアクなのですが、それはさておき、おばあちゃんがおすしを作ってくれたときに、フキを水に漬けてアクを抜いていました。そういう経験が遊びの中にばんばん表れているのです。

「スープできました。ちょっと味見て」と、セリナがカップ麺の容器に茎を浮かべて私に差し出しました。私が香りをかぎ分ける仕草をすると、「特製スープには季節のお野菜が入っています。分かりますか」と尋ねてきます。これは昭和の時代の即席麺のCMのパクリです。「この春らしい香りは」と目を閉じて味わうように聞くと、「はい、フキです。あと、アスパラも入っています」と言います。「なるほど、その香りのハーモニーだったんですか」と私が言うと、隣から「先生、おすしはお好きですか」とリコが尋ねます。「ちょっと待ってよ。先生を取らないでよ、あんたら」と言うと、私は草食系ですから「まあまあ、まあまあ」と逃げて行きました。「あんたらには取らせない。逃がさないぞ」という強い決意が見えます。「先生、おすしはお好きですか」とリコが尋ねます。「先生、ここのおすしは最高なんですの」とセリナがうっとりした表情で言います。

そういう手練手管のやりとりの中で、子どもたちがやっている様子を見てまず分かるのは、テーマを持って話を共有していることです。おばあちゃんの作ってくれたおすしを食べたという自分の主観的な経験を表現するだけでなく、みんなに伝わるような言葉で表現する力が備わっていることが分かります。そして、遊びをしている仲間たちが共通のテーマを確認しながら、しかもアスパラやフキに見立てているものの特徴をしっか

りと押さえながらやっているのが５歳児の遊びのすごみです。

５歳児の様子を見ると、言葉が思考の媒介になっています。「さあ、あとはちらし寿司とスープだけね」というように表れたりしますが、子どもたちの中でものを考える力が、ボキャブラリーが増えたことでかなり強力になっていることが分かります。また、「何だこれは」と思うような、チューリップの茎がアスパラやフキなどと命名されて遊びをエキサイティングにし、あたかもそれがあるかのようなことをしています。

会話を見ても、副詞や形容詞などの修飾語が上手に使えるようになっています。接続助詞や接続詞を上手に使うことで、事象と事象をうまくつないで表現しています。順接的な表現もそうですが、「すみませんが、ちょっとアスパラいただきますね」という逆説的な表現でさらにハートをわしづかみするような表現の巧みさを子どもたちは身に付けています。

そういう遊びのときに、私たち保育者は非認知的能力を育てる上でどんな役目をするのかということです。勉強には直接つながりませんが、人生を豊かにする生きる力のもとをどう育てるかということです。

まず保育者は、「新しい知」を作り出す過程に関わっています。子どもたちは五感で感じますから、テレビを見ているよりも、見ながら揺れたり、音が出たり、匂いがしたり、感覚をたくさん使うほどリアリティが増えるということです。ですから、子どもたちの様子を見ると、見た目は視覚、ぽきっとしたら筋が剥けるというのは聴覚、触れたときの様子は触覚を使っています。味覚はいくら何でも食べたらアウトなので関係なくて、匂いを出しているので、私は「うーん、この香りのハーモニーだったんですか、この春らしい香りは」というふうに、嗅覚を使って一生懸命言っています。

そして、先生がいなくても遊べるのがとても自立した子どもたちですが、先生がいたら余計に盛り上がるところが私たちの腕の見せどころだと思います。当園には鳴門教育大学から教育実習生が来ます。歌ったり、踊ったり、ものを書いたり、作ったりするような指導は、キャリアを積めばだんだんスキルアップしますが、遊びをより楽しくエキサイティングにするのは私たちのセンスが問われますから、「園長」と言われるとドキッとして、「絶対に子どもたちには負けられない。気の利いたことを返さなくては」という気持ちになるという話をよくします。

今の中でもそうですが、子どもたちは遊びの中で意見の食い違いやトラブル、実験や調査、そして話し合いやディスカッション、そのことについて「みんな聞いて」と言って発表するようなことを繰り広げていきます。その中で子どもたちは発想したり、論理的に考えたり、表現力を持ったり、思考力を展開したりして、人とのコミュニケーションの力をたくさん発揮していきます。こういうことをぐるぐる回すような園生活が必要となります。

６．非認知的能力を引き出す学級経営

子どもたちが非認知的能力を発揮するときに、やはり学級経営というか、学級の雰囲

気作りがとても大事だと思います。いろいろ萎縮したりすると、子どもたちの非認知的能力はなかなか発揮できません。

私は昭和の人間なので、すごく反省します。私は甲子園を本気で目指していて、阪神タイガースに入団したかったのですが、心が折れてしまい、気が付いたら幼稚園に来ていました。なぜなら、４番バッターでキャプテンだったのですが、チャンスに弱かったからです。昭和の人間というのは大体、ネガティブルールで育てられました。昭和生まれの先生方はそうではありませんか。「そんなことをしてはいけないよ」「人に迷惑を掛けてはいけないよ」と、○○してはいけないという教育の仕方です。「○○しないと、○○できません」というダブルパンチもあります。「お母さんの車をそんな汚い手で触らないで。そんな汚い手の子は、放って帰るよ。あんた、歩いて帰りい」と言ったりします。するとどんな人間が育つかというと、どうしたら叱られないかというふうに顔色をうかがったり、親が叱れなくなったり、先生より大きくなったら、「お礼参りに行きますか」ということになります。

実は、私もそうです。「変化球に手を出したらいかん。変化球に手を出したら凡退になって甲子園に行けない。でも、やっぱり出してしまった」ということで甲子園に行けなかったのですが、最近の若いスポーツ選手たちはピンチですごく燃えるでしょう。「俺が打ってヒーローになってやる」というふうに、ピンチをチャンスに変えています。すごいですよね。それはアメリカのスポーツ心理学、ポジティブルールで育っているからです。そういうコーチングがあるからです。

ポジティブルールは、「○○しましょう」なのです。先ほどの例で言うと、「変化球に手を出してはいけない。ああ、やっぱりスライダーを打ってしまってセカンドゴロだった」ではなくて、「いい球が来たらガツンと打て。期待に応えるんだ。おまえが打ったら甲子園に行けるんだぞ」ということです。「おまえが凡退したら甲子園に行けないんだぞ」とは全く違います。

親の関わりもそうです。「汚い手でお母さんの車に触らないで。放って帰るよ」ではなくて、「手をきれいに洗おうか。手がきれいになって、おうちに帰ったらホットケーキを一緒に焼こう」と言うのです。するとどんな人間になるかというと、どうしたら褒められるか、どうしたら評価されるのかとポジティブに考え、いいことをたくさん考えるようになります。実は、それがクラス経営や園経営に必要なポジティブルールなのです。

「お母さんとの関係をこじらせないようにしなさい。お母さんとの関係がこじれてきたら、あなたもいろいろ大変だから」ではなくて、「お母さんに『おはようございます』『髪切られました？　よくお似合いです』とハラスメントにならない程度に言ってごらん」とか、「『おはようございます』と言ったときに、『お母さん、僕の顔に何か付いていますか』とちょっととぼけてごらん。お母さんたちが『この先生ってこんなところがあるんだ』と言うようにやってごらんよ」などといろいろ提案します。「でも、提案を聞いてくれなくても僕は気にならないけど、いいところがあったらばしっと取っていくよ」と職員にも言っています。ポジティブルールで学級を経営するのはとても大事

だと思います。

私たちの幼児教育は計画的で意図的な教育ですから、保育所や幼稚園という作られた施設に子どもたちが来ています。意図的・計画的でなければ、野原で遊んでいればいいのです。われわれはそのように指導のねらいを持っています。今からお話しするのは、５歳児の９月の事例です。「友達と思いや考えを出し合い、イメージを共有し、試行錯誤しながら、共に生活する喜びを味わう」「戸外で十分に体を動かして遊ぶ」というねらいを定め、クラス全体の子どもたちに共通して経験してほしいと思うことを設定しています。しかし、全体的にそのようなことをねらいながら、それぞれの子どもたちで経験の仕方や個性の出し方は異なります。私たちは大枠のねらいと子どもたち一人ひとりのねらいの両方を持ちながら、マクロな視点とミクロな視点を繰り返しながらやっていきます。カメラでいえば、ワイドで見たり、ズームで見たりするようなことです。

指導のポイントと環境構成の留意点としては、例えばこのようなことが書いてあります。「友達の考えや協力があると、遊びがより楽しくなっていくという気付きに共感しながら、相手に自分の思いや考えを表現しようとする意欲を励ましていく」「必要な用具や遊具材料などを幼児と一緒に準備したり確認したりしながら、幼児が分かりやすく準備や片付けがしやすい環境に整理していく」などです。これが共通のねらいです。

ここからが具体的な実践です。いろいろなその子らしさをポジティブルールの園の雰囲気の中で出させていくことが、非認知的能力を引き出し、育てていくと思います。主人公はセイガ君という男の子です。冬でもキャミソールを着てくるユニークな男の子です。この子は５歳ですが、本当に２年間幼稚園にいたのかと思うぐらい何もできません。しかし、この子には魅力があります。いろいろな人間を巻き込んで、すごいことをやってくれるという事例です。

セイガは登園してくるなり、「先生、昨日の『鳥人間コンテスト』のテレビ見た？」と興奮した様子で私に話し掛けてきました。「僕も見たよ。すごい人力飛行機が出てきたよな」と私が言うと、セイガは「OK。僕も今日、それを作るから」と、そそくさと持ち物の整理を済ませて、材料倉庫に駆けていきました。ところが、彼はうまく見つけられなくて案の定、「先生、何かないかなあ。軽くてばきっと割れなくて、ちょうどいいやつ」と保育室に帰ってきて私に尋ねます。「うーん、君が作りたいのはどんな飛行機なの？」。私も一応担任なので、自分で探せる子になってほしいと願っているのですが、そう聞くと、「そりゃあ、僕が乗れるやつだけど」とセイガは少し思案している表情になります。さすがに自分が乗れるものは無理だろうとセイガも思うわけです。すると、そばにいたアツシという賢い子が助けてくれるのです。「乗れるやつは無理だから、小さい模型ってことだろう？」と言葉をつなぎます。「OK、そういうことよ。アッちゃんも僕らのチームに入るか」と、セイガはアツシや私を見回して言いました。私たちは一瞬でチームスタッフにされてしまいました。

このように巻き込んでいく力があるのです。何もできないけれども、何でもできる子をみんな巻き込んでいく魅力があるのです。しかも、軽くてばきっと割れないものをと

いうことで、私が緑色の野菜の支柱を持ってきてあげたのです。このように、私に苦労させるかわいい子たちなのです。「先生はさっき言った材料の準備を頼む」。自分がうまく探せないからです。「僕とアッちゃんは設計図を描くぞ」「おう」。アツシは裏側の白い広告紙を、私は使えそうな材料を集めに走りました。その後、接着剤を乾かしながら、設計図に沿って作業工程は進んでいきました。関心を持って製作に参加してくる仲間も増えました。自分たちの飛行機が出来上がりつつあることが誇らしく、小さい組の子どもたちを誘って見学ツアーを企画したりして、テレビなどから仕入れた飛行機作りのうんちくを披露したりもしました。いいとこ取りですが、憎めないのです。

３日かけて本体が仕上がると、セイガとユウキは「やっぱりプロペラは要るだろう。この仕事ができる人は先生しかいない」と言って、私の手を握って重々しく言いました。私はこのように子どもたちに巻き込まれて、くちゃくちゃにされるのが幸せで、３度の飯より好きなビールよりも保育が好きなのです。今もちょっと太っていますが、もっと前も太っていて、ヘルニアで腰が痛いので保育を諦めようかと思っていたのですが、医者の勧めで10kgのダイエットをして頑張っています。「土日に探してくるけど、もしなかったときのことも考えておいてくれたまえ」と私も重々しく言って、二人の手を握り返しました。

月曜日の朝一番、私の用意したプロペラとゴムを見つけたアツシが興奮気味に、「これでいける」と言いました。次々と登園してくる子どもたちはアツシにプロペラを見せられ、アツシと同じように私の手を握りに来て、「ありがとう。先生に一番に見せてあげる」と言いました。私はそんなにうれしくないのですが、やがてプロペラ付きの飛行機は完成しました。飛ばしてみると前のめりに墜落しました。「羽がちゃんとしていないんだ」「もっと前だろうか」「風を計算するんだ」「もっと高い所から飛ばすんだ」「僕は後ろを、君は前を持って、二人パワーでいこう」などと、代わる代わる飛ばしながら機体を微調整したり、飛ばし方や場所を工夫したりしていました。

７．非認知能力を育てる環境

私たちは、子どもたちの様子を見て分かることがあります。まず非認知的能力を育てる環境としては、安心・安定できる環境があるか、そしていろいろな自分を表現できる環境があるかということが挙げられます。表現というのは、歌ったり踊ったりもそうですが、自分のことを表現できるようなこと、うれしさ、悲しさ、寂しさ、全部そうです。それから、探究できる環境があるかどうか。今ならセミなどの虫を探すのもそうですが、それだけではなくていろいろなことを自分なりに工夫しながら探究できることになります。そして、創意工夫できる環境、チャレンジできる環境があるかどうか。チャレンジというのは、勇気を出して挑戦したり、競い合ったり、スキルアップのために一輪車の練習をしたりするようなことです。

この五つの要素がバランスよくあることが非常に大事です。新学期のときや小さい子どもというのは、安心・安定のウエイトが大きいと思います。５歳なら創意工夫やチャ

レンジが大きいと思います。それぞれの学級や子どもたちの実態を見回しながら、重い・軽いは別としてこの五つの要素がきちんと入っていることがとても大事です。

当園ではまず、気付く力、好奇心・探究心を磨くために、やはり五感を通した直接体験をとても大事にしています。砂場で裸足になり、水の冷たさや気持ち良さを味わったり、シロツメクサを摘んで匂いをかいだり、ふらふらするロープウェイ遊びをしたり、とにかくいろいろな感覚を働かせて気付く力を育てることを非常に大事にしています。ですから、とても小さな幼稚園なので、自分の幼稚園の中だけでは事が済まず、いろいろな所に出掛けています。

ポップコーンを作るためにトウモロコシを育てているのですが、植えてからトウモロコシができるまでずっと我慢強く待ったり、ひげが生えてきたことに気付いたりします。トマトを植えたら、赤くなるのを辛抱強く待ちます。人間が食べたいと思っても、すぐに赤くなってくれません。我慢強く待つことも非認知的能力です。いろいろなものを観察したり、不思議に思ったりするような環境に出向いていくことも大事にしています。

それから、幼児期にふさわしい体験ができる時間や空間が、非常に大事になります。今はコロナでできていませんが、当園では「おやつの部屋」というものを平成元年から作っています。つまり、片付けをしてからおやつではなくて、午前９時半から11時までの自分の好きな時間に来て、おやつが食べられます。年長児が自分のところで取れたイモでマッシュポテトなどのおやつを作ったり、洗い物をしたり、みんなで協同でできるようにしています。そういう中で異質なものと出会ったり、興味・関心を持ったり、人との交流があったり、関係性を作ったりすることが遊びの中でいろいろ経験できるように、生活の中でできるような場面を作ることも私たちはとても大事にしています。そして、その中で好きな遊びが心ゆくまでできることを大切にしています。

たくましい体や心が育つように、表現したり、チャレンジしたり、とんかちやのこぎりは本物を持たせているのですが、集中してそのことに取り組んだりしています。とんかちや釘があると時々、「子どもたちはけがをしませんか」「指を飛ばしませんか」と言われるのですが、私は平成元年からここに就職して以来、そんな子は一人もいません。ぐるぐる回して危ないということもありません。子どもは場の雰囲気をちゃんと読みます。そして、小さい組の子たちが来て危なっかしければ、年長児たちが教えてあげます。最初は先生たちも気にしながらやっていますが、５、６月ともなると先輩たちがきちんと教えられるようになり、文化が伝承されていきます。

そして、競い合います。小学生が来てサッカーをしたり、一輪車に乗ったり、こまを回したりしていますが、１日や２日ではできません。足が早いとか、体が大きいとか、自分の努力だけではどうしようもないようなことも、その人の良さや持ち味にしています。そういう中でやり抜く力が育っていきます。やる気、頑張る力、そして自分の気持ちをコントロールしながら頑張って自信を付けていきます。体の機能もしっかり伸ばしていける場が、自分の園にどれくらいあるかということもチェックすべきところです。

子どもたちはものを作ったり、表現したり、自然に触れたり、あるいは絵本作りなど

文化的なことをしたり、いろいろなことを経験する中で遊び込むことができますし、いろいろなことを経験する中で、「僕はこれが得意」「僕はこれが苦手だけど、あれは大好き」などと言って、自分の人生の幅が広がっていきます。そのようなことも子どもたちの非認知的能力を育てる上でとても大事です。

もちろん子どもたちが表現するときも、自分自身の良さや人の良さに気付くためには、やはり表現として表れることがとても大事です。ですから、表現のプロセスに関わりながら、お互いの良いところをまず先生が認め、それを取り上げて話したりしながら、だんだん気付くようになっていきます。

個々人で表現することもあれば、今はコロナで難しいのですが、伝承遊びをしたり、オペレッタ（合唱）をしたりしています。今は全てマスクを着けながら行っていますが、子どもはたいしたもので、マスクがあってもへこたれないのは本当にすごいと思っています。もう少しすれば、マスクもネクタイと同じように標準的なエチケットになるかもしれないということを予感させてくれます。

今日は先生方と遠く離れていますが、大阪の先生たちのことが私は大好きです。息子たちは二人とも大阪にいるので、本当は先生のところに飛んで行って、息子たちのところで飲んで帰りたかったのですが、コロナのためにうまくいきませんでした。大阪の先生たちは当園の研究発表会に毎年大勢来てくれるので、本当に親類のように思っています。今日は拙い話でしたが、非認知的能力の話をさせていただいたことを大変喜びに感じています。長い時間にわたってご清聴いただき、ありがとうございました。またお会いしてお話しできる日を心待ちにしております。